

【金沢国税局長賞】

「身近にある税」

富山県立高岡南高等学校二年 阿部 弥来

私が小学六年生の時、母がくも膜下出血で倒れた。その時私はその場にいなかったが、近所の人気が付いて救急車を呼んでくれたおかげで、母は何とか一命を取り留めることができた。もしあの時救急搬送されていなかったらどうなっていたのか、想像するだけで背筋が凍る思いだ。私はその時初めて、日本の公共サービスのありがたさに気付いた。

テレビやインターネットなど、様々な媒体で税についての話題を見かける。しかし、そのほとんどが増税についてなどの大衆にマイナスなイメージを与えるもののような気がする。実際、親や学校の先生からも「所得税のせいで…」というように税の負担を嘆く言葉を聞いたことがある。姉は大学生でバイトをしているが、「百三万の壁」を気にしている様子も見つたことがある。私はまだ消費税を納めることしかできない立場であるが、たしかに私が親や姉の立場ならば納税を渋ると容易に想像できた。一生懸命働いて、いざ給料を受け取る際に、その半分以上が税として天引きされていたら必ず嫌に感じるに違いない。しかし、この納税は重要なもので必要不可欠なことであると理解する必要がある。私たちがこのように税を納めているため、私の母が倒れた際にも救急車が派遣され、整備された道路を通り病院まで搬送することができたのだ。その後の手術費や入院費も、社会保険によって負担が減っている。個人の出来事ではなく社会全体を見渡してみると、公共交通機関の整備や高品質な医療、教育機関の維持を支え、また、年金や失業保険などの社会保障制度を提供して生活の安定や機会の平等につながるようになっている。私が普段電車に乗り高校へ通い教育を受けているのも、暑い時につけるエアコン、寒い時に使用する暖房もその燃料費は税によって賄われている。当たり前のように利用しているものに対して、一歩下がって税を意識した視点で見ると、本当にさまざまな事柄が挙がる。しかし、最近のメディアは税に対してプラスの面をあまり報道しない。そのような世の中で、個人が税に対する理解を強め、そのメリットを知って納税を前向きに思えるようになれば、よりよい社会が形成されていくと思う。私も将来就職をして本格的に納税をする大人になったとき、良い社会を築き上げる一員になりたいと強く思った。